

日本のユーラシア史研究 ――内陸アジア・北アジア・満洲――

杉山 清彦 (東京大学大学院総合文化研究科・教養学部)

1. 自己紹介と報告趣旨

・大阪大学文学部東洋史学研究室出身→教養学部歴史学部会・総合文化研究科地域文化研究専攻所属

・東洋史学> 東アジア史 > 中国史? > 大清帝国史 ≒「清朝・満洲史」
中央ユーラシア史>満洲史?

⇒「ユーラシア史」=「ユーラシア」+「歴史学」の諸分野 *「ユーラシア史」という分野があるのではない
: 東洋史学のうち、〈非シナ・非漢人〉を主対象としてきた諸分野の概況と展望 ×地域研究
……中央ユーラシア史・内陸アジア史・北アジア史・中央アジア史・満洲史・塞外史・西域史 etc.
〈要点〉東洋史学は中国史からスタートしたのではなく、戦後に多言語化・多元化したのでもない。

2. 〈ユーラシア×歴史学〉のフィールド

(1) ユーラシア大陸>中央ユーラシア≧内陸アジア≧中央アジア(広義)>中央アジア(狭義) etc.>…

①中央ユーラシア Central Eurasia, Eurasie Centrale

②内陸アジア Inner Asia, Innermost Asia(極央アジア)

: ユーラシア大陸から周縁の湿潤部を除いた、乾燥を共通項とする巨大な歴史世界=草原とオアシス

*②は19世紀～、①はサイナー(Denis Sinor 1916-2011, 匈→仏→米)が1940年代に創案。

③中央アジア Central Asia, Zentralasien, Asie Centrale

[広義] ②とほぼ同義

[狭義] ①②の下位区分で、東・東南・南・西・北アジアと並列する地域単位 ≠中央ユーラシア!

=東西トルキスタン: 西≒旧ソ連領; 東≒中国新疆ウイグル自治区

*Средняя Азия(中部アジア=西)、Центральная Азия(中央アジア=東 →旧ソ連領の総称へ)

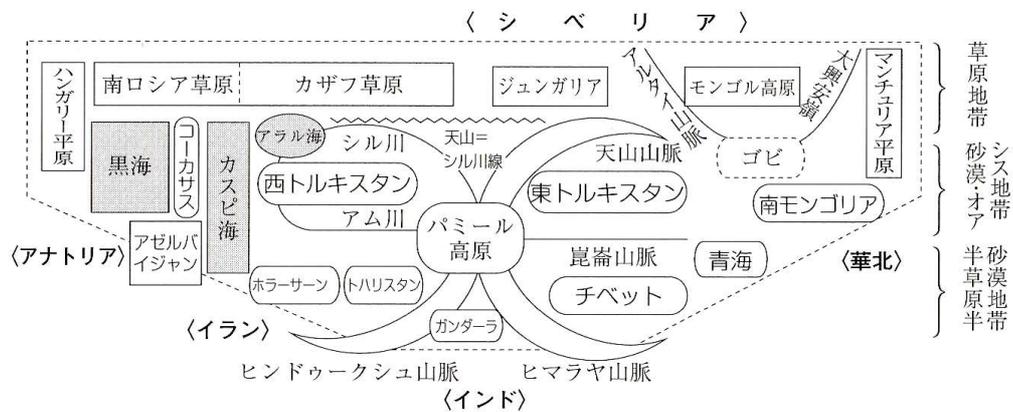
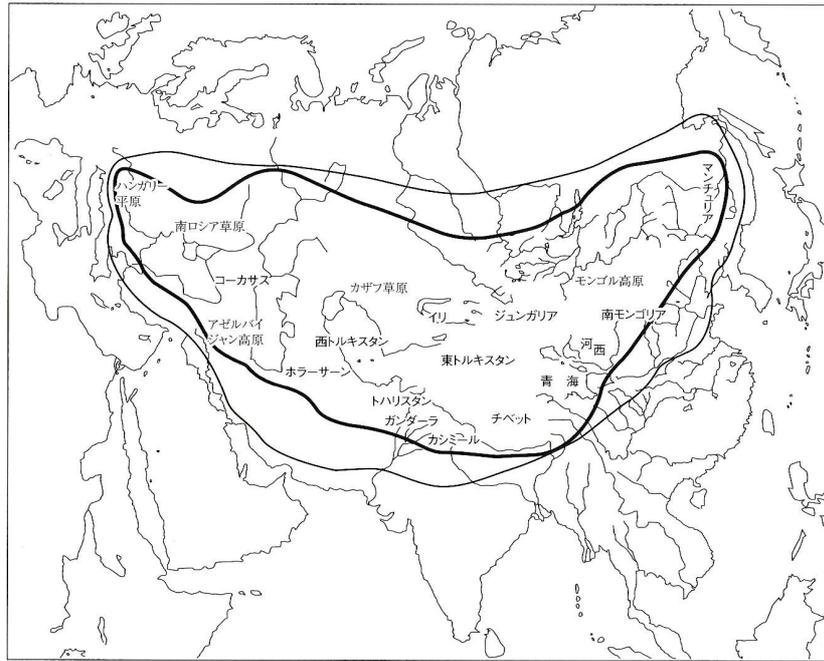


図5-1 中央ユーラシアの概念図(杉山)



(2)「ユーラシア」の含義

- ・「Euro+Asia」であることの強調：「西洋／東洋」枠組みに対する批判
- ・〈西〉との綱引き：ソ連滅亡後のスラブ=ユーラシアの浮上 Cf. ロシア・ユーラシア学派
：「ヨーロッパ=ロシアを除く旧ソ連圏」or「トルコ=イスラーム世界」←モンゴル・チベット除外(!)
ex. 『中央ユーラシア史』(2000)、『中央ユーラシアを知る事典』(2005) ←森安・報告者の批判
- ・〈東〉の切り取り：日本史・海域アジア史の包含と日本史・中国史の相対化のための設定
：東部ユーラシア(モンゴル以前に重点)、東ユーラシア(上田信、環境史の視点)、ユーラシア東方

(3) ユーラシア東方の地域・集団のまとめ

- ・マンチュリア(満洲) Manchuria, Mandschurei, Mandchourie, Маньчжурия
：ツングース系集団が主に活動してきたユーラシア東北部の森林地帯 ≠満洲(近代) Cf.北東アジア
- ・モンゴル(モンゴリア) Mongol, Mongolia
：北(外)モンゴル・南(内)モンゴル、西モンゴル(ジュンガリア) *新疆北部の二重性：準部・回部
- ・チベット Tibet
：大チベット=中国チベット自治区+青海(アムド)・四川西半(カム)他

⇒本報告ではユーラシアの内陸乾燥地帯を「中央ユーラシア」と総称し、その東方・東半を扱う。

3. 東洋史学と中央ユーラシア史研究の展開

◇東洋史学=近代歴史学(ランケ)+ヨーロッパ東洋学・清朝考証学・日本漢学

：日本で独自に成立した、近代歴史学的アプローチによるアジア・アフリカの歴史の研究

(1) 日本「東洋史学」草創期(～20C初)

○近代歴史学を受容・摂取：1887(明治20)東京帝大文科大学に史学科(西欧史)開設：万国史
→日本の「歴史学」のはじまり=西欧史の輸入から出発：漢学との訣別；日本史・東洋史の分出生

- 「東洋史学」の創出：1904 東京帝大に支那史学科(1910 東洋史)；1907 京都帝大史学科に東洋史講座
- ・白鳥庫吉(1865-1942)：史学科出身の「東洋史学」創始者；南北対立史観 デュアリズム
 - ・内藤湖南(1866-1934)：王朝史に代り中国史を時代区分；『満文老檔』発見・将来
 - ・羽田 亨(1882-1955)：現地語史料・出土史料の本格利用推進；『西域文明史概論』（1931）
 - ・松田壽男(1903-82)：東西交渉史・歴史地理＝『乾燥アジア文化史論』（1938）：Dry Asia
 - ・前嶋信次(1903-82)：東西交渉史・イスラーム史
- 目標①近代歴史学を独自にアジアに適用して、近代国家日本の学問を欧米に認めさせる *白鳥訪欧
- ②現実政治における進出先の研究：「満鮮史」「満蒙史」
 - ③日本仏教のルーツを探る：仏教学、大谷探検隊
- ①＝欧米学界の研究空白地：中央アジア・北アジア、遊牧民族史
- ②＝隣接する地域から順に展開：韓(朝鮮)半島、満洲、モンゴル…
- 中国史の見直し＝「塞外史」からの捉え直し：宮崎市定『素朴主義の民族と文明主義の社会』
「満洲は支那に非ず」論を提供していくことに：矢野仁一、稲葉岩吉
- (2) 国策の時代と研究の分化・専門化（～1945）
- 大陸進出の本格化：ポスト・資金の投下、現地調査の便宜 ↔ 下請け的研究の強要
- ・満洲史・モンゴル史の盛況：満鉄歴史地理調査部、日満文化協会、満蒙文化研究事業 etc.
 - ：満・蒙文史料の開拓 基礎事項の考証 「東洋史の2人に1人が満洲史」
 - ・隣接分野の隆盛と影響＝考古・建築・美術調査：『慶陵』『熱河』『居庸関』
 - 人類学調査：鳥居龍蔵、今西錦司・梅棹忠夫
 - *隣接諸学の影響：ウラジミルツォフ『蒙古社会制度史』、シロコゴロフ『満洲族の社会組織』
 - ・研究領域の拡大＝イスラーム・東南アジア・南アジア研究のスタート
- (3) 戦後の「東洋史学」の再出発と中央ユーラシア史（1945～ca. 1980）
- *研究の連続と断絶：研究・教育体制の継続 ↔ 現地調査・交流の杜絶、国家的支援の喪失
- 戦後における主役交代：中国史・社会経済史の隆盛
- ・マルクス主義歴史学の解禁と共産中国成立の衝撃：中国史の盛行と社会経済史の主流化
 - ←ウィットフォージェルの提起を受けた「征服王朝」論 *マルクス主義歴史学の流れの「遊牧封建論」
- フィールドから文献へ *前提：日本の大陸撤退；ユーラシア東方の共産化 → 現地との断絶
- ・将来史料と欧米所蔵史料による徹底的な文献研究
 - ：敦煌・トルファン学(藤枝晃)、ウイグル文書(山田信夫)、モンゴル年代記(岡田英弘)
 - ・非漢語一次史料の研究・探求
 - ：突厥碑文(護雅夫)、『満文老檔』・「満文原檔」(神田信夫・松村潤・岡田)、『集史』(本田實信)
- 「アジア諸民族史」をどう捉えるか、何と呼ぶか
- ・「北アジア・中央アジア」への複線化：『史学雑誌』「回顧と展望」(1950～80's)、山川「世界各国史」
 - ・「内陸アジア」：内陸アジア史学会(1960)、岩波講座『内陸アジア世界の展開』(1970)、「回顧と展望」
 - ・「中央ユーラシア」：『中央ユーラシアの世界』(1990)、岩波講座『中央ユーラシアの統合』(1997)
 - *シルクロード史観論争(1977～)：間野英二(トルコ＝イスラーム史)による東西交渉史観批判

(4) 現地踏査の復活と研究の多様化・細分化 (ca. 1980～)

○冷戦の弛緩・終焉＝フィールドワーク・史料調査・留学の開放、史料状況の激変 + 電腦化の進展

- ・史料蒐集＝典籍から文書・写本へ：公文書館、フィールド収集
- ・非文字資料の蒐集・活用＝ヒアリング・オーラルヒストリー

＊史料の電子化：漢籍、イスラーム圏の電子化・Web化の急進展 → 史料環境の激変

○中央ユーラシア史研究の新展開

- ・現地調査の活発化＝考古発掘の成果：匈奴・テュルク・キタイ・モンゴル 「モンゴル時代の考古学」
- ・多言語史料の活用＝出土文書・石刻史料・写本：ソグド語・トルコ語・ペルシア語・チベット語 etc.
- ・近現代史研究の進展：トルコ＝イスラーム世界の浮上 ＊「ユーラシア」の用法にも影響
- ・世界史理解への提言：岡田英弘・森安孝夫・杉山正明 ＊2018 高校学習指導要領に「中央ユーラシア」
＊清朝理解への影響＝北米のアルタイ学派～New Qing History；王岐山の岡田英弘評価(2015)

○イスラーム研究の重厚化

- ・研究機関の整備、研究者の増加：アラブ・イラン(ペルシア)・トルコ三大分野の確立
- ・イスラームの「周縁」部研究の充実：中央アジア・コーカサス・東南アジア・中国回民など

4. 中央ユーラシア史研究の成果と課題

《特徴・長所》

- ・徹底的な文献研究：歴史地理考証、文献学的研究手法、歴史学的考察 ≠ 東洋学
- ・隣接諸学との連携：考古学、美術・建築、仏教等宗教、言語学
- ・日本のアドバンテージ：東西史料の利用能力(現地人に比して欧米に、欧米人に比して漢籍に)

↑↓

《注意・反省点》

- ・かつての外在性・没思想性：地域・住民の主体性・自律性・内在性の軽視・欠如
＊戦前の反省：「侵略を積極的に支えるものではなかったが、侵略に反対するものでもなかった」
- ・「民族史」との距離のとり方の難しさ：かつての「満洲分離論」、現代の現地における「民族史」

《意義と課題》

① 現地に即した研究への転回：内在的・自律的な対象・課題設定

←→他の地域・集団の研究との対話・交流の重要性：「タコツボ化」の回避の要

「中央ユーラシア」自体の方法的性格というパラドクス ＊自分でそう思っている人はいない(!)

② 「中国」なるものを歴史的に見直す手がかり：「少数民族」の個別史、ではない！

：統治空間、住民構成、言語・文字分布、それらの変遷、ひいては「漢族」の定義まで

→近代に接続する「中央ユーラシア世界の大清帝国」理解の重要性 ……我田引水で、オチ

＊研究の障碍：新ウイグル・チベット・モンゴルの研究に対する中国共産党の監視・干渉・妨害

ex. 北米「新清史」に対する2010年代の急激・執拗な攻撃・排除

【参考文献】

- 井上直樹『帝国日本と〈満鮮史〉 大陸政策と満州・朝鮮認識』（増選書）塙書房, 2013.
- 梅村坦『内陸アジア史の展開』（世界史リブレット）山川出版社, 1997.
- 宇山智彦『中央アジアの歴史と現在』（ユーラシア・ブックレット）東洋書店, 2000.
- 岡田英弘『世界史の誕生 モンゴルの発展と伝統』（ちくま文庫）筑摩書房, 1999（初版 1992）
- 岡田英弘『岡田英弘著作集Ⅱ 世界史とは何か』藤原書店, 2013.
- 小松久男編『中央ユーラシア史』（新版世界各国史 4）山川出版社, 2000.
- 小松久男編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社, 2005.
- 小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社, 2018.
- 杉山清彦「大清帝国史研究の現在——日本における概況と展望——」『東洋文化研究』10, 2008, pp.347-372.
- 杉山清彦『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会, 2015.
- 杉山清彦「中央ユーラシア世界——方法から地域へ——」羽田正編『地域史と世界史』（MINERVA 世界史叢書①）ミネルヴァ書房, 2016, pp.97-125.
- 杉山正明主編『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』岩波書店, 1997.
- 杉山正明『遊牧民から見た世界史 民族も国境もこえて 増補版』（日経ビジネス人文庫）日本経済新聞社, 2011（初版 1997）
- 中見立夫「日本の東洋史学黎明期における史料への探求」『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』山川出版社, 1992, pp. 97-126.
- 中見立夫「日本的「東洋学」の形成と構図」『岩波講座「帝国」日本の学知 3 東洋学の磁場』岩波書店, 2006, pp. 13-54.
- 羽田 亨『西域文明史概論・西域文化史』（東洋文庫）平凡社, 1992（初版 1931・1948）
- マッキンダー, H. J. 『マッキンダーの地政学——デモクラシーの理想と現実』原書房, 2008（原著 1919）
- 松田壽男『アジアの歴史 東西交渉から見た前近代の世界像』（岩波現代文庫）岩波書店, 2006（初版 1971）
- 松田壽男・小林元『乾燥アジア文化史論』四海書房, 1938.
- 間野英二『中央アジアの歴史——草原とオアシスの世界——』（新書東洋史⑧：講談社現代新書）講談社, 1977.
- 間野英二・中見立夫・堀直・小松久男『内陸アジア』（地域からの世界史 6）朝日新聞社, 1992.
- 護雅夫・神田信夫編『北アジア史（新版）』（世界各国史 12）山川出版社, 1981.
- 護雅夫・岡田英弘編『中央ユーラシアの世界』（民族の世界史 4）山川出版社, 1990.
- 森安孝夫「日本における内陸アジア史並びに東西交渉史研究の歩み」『内陸アジア史研究』10, 1995, pp.1-26.
- 森安孝夫「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」『内陸アジア史研究』26, 2011, pp.3-34.
- 森安孝夫『興亡の世界史 05 シルクロードと唐帝国』（講談社学術文庫）講談社, 2016（初版 2007）
- 森安孝夫『シルクロード世界史』（講談社選書メチエ）講談社, 2020.
- 山田信夫「中央ユーラシア史の構想」『天山のかなた——ユーラシアと日本人』山田先生著作刊行会, 1994, pp.96-102（初出 1965）
- Sinor, Denis, *Introduction à l'étude de l'Eurasie Centrale*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1963.
- Sinor, Denis, *Inner Asia: A Syllabus*, Bloomington: Indiana University, 1969.
- Sinor, Denis, "Inner-Asia - Central Eurasia", in *Indo Asia*, Heft 3, 1974, pp.214-222.